

最後の診断（アーサー・ヘイリー著、新潮文庫、昭和50年8月発行）

「病理学者はしばしば患者がめったに見ることのない医者と呼ばれている。しかし病院のほかの部門で、病理以上に患者の幸福に影響を及ぼすところは数少ない。」いよいよ宣伝文句のはじまりだぞ、とセドNZは思った。ピアスの次の言葉は予想が当たっていたことを証明した。

「患者の血液を検査し、便を調べ、病気をつきとめ、腫瘍が悪性であるか良性であるかを判定するのが病理学である。病気に関して患者の担当医に助言をするのが病理学であり、時おり、医学における他のすべてが失敗したとき」—ピアスは言葉を休めて、ジョージ・アンドルー・ダントンの遺体を意味ありげに見下ろした。学生たちの目が彼の視線を追った—「最後の診断をくださるのが病理学者である」ピアスがふたたび言葉を休めた。この老人はなんてすごい名優なんだろう、と、セドNZは感心した。まさに臆面もない、流れるような大芝居だ！ピアスは葉巻で指差しながら続けた。「あれを見たまえ、たいていの解剖室の壁に見られる言葉だ」看護学生たちの目は彼の指を追って、医療品会社が持ち込んだ額入りの格言—**Mortui Vivos Docent**—に向けられた。ピアスはラテン語を読み上げ、それから、翻訳した。「死者は生者を教える」（p 47～）・・・

ビビアンはしっかり落ち着いていた。もう大丈夫だと思った。始まって間もなく、鋸が死者の頭蓋骨に切り込むのを見たときは、頭から血が引いて、

めまいがするのを感じた。そのとき彼女は失神寸前だということに気付いて、必死でこらえた。なぜかとつぜん子供のころのある出来事を思い出した。ある休日に、オレゴンの片田舎の森の中で、彼女の父親がむきだしの狩猟ナイフの上に倒れて、脚をざっくり切ったことがあった。気の強い父親にしては意外だったが、大量の出血に震えあがってしまった。ところがふだん森よりも家の中にいることの多い母親が、突然強い強い女に変貌した。彼女は止血帯を作って出血を止め、ビビアンに助けを呼びに走らせた。それから、木の枝を編んだ急造の担架に怪我人を乗せて森の中を運んでゆく間、彼女は30分ごとに止血帯をゆるめて血行をうながしてから、また出血を止めるために止血帯をしめつけた。あとで医者が語ったところによると、父親の脚はそのおかげで切断を免れたのだった。その経験があるからには、今後解剖を見学するときのどんな問題にも耐えられるだろう。(p 54～) . . . .

だがそんなことより彼自身の問題があった。病院をやめるかとどまるかという問題だった。もしやめるとしたら、それから先はどうなるのか？最近、健康にはくれぐれも留意してきたにもかかわらず、疲労をおぼえることが多かった。これまでは夜中に電話でおこされても苦にならなかったのが、このところ大儀に感じられるようになっていた。昨日昼食時に、皮膚科医カーシュが新しいインターンに、「きみも皮膚科をやるべきだよ。な

にしろこの15年間1回も夜中の電話でおこされたことがないからね」と話しかけるのを聞いて、ドーンバーガーはほかの連中と一緒に笑ったが、内心いささか羨ましさをおぼえた。しかし1つだけ確かなことがあった。体力の衰えを感じたらためらわずに引退するために、常々注意深く自分を観察していた。そのときはすぐにもやめるつもりだった。彼は長く地位にとどまりすぎた例を多く見ていた。それだけは避けたいと決心していた。しかしさしあたりは、あと3ヶ月ばかりこのまま仕事を続けて、それからじっくり考えてみるつもりだった。彼はすでにパイプに煙草を詰め終わっており、マッチに手をのぼした。マッチを擦ろうとした瞬間に電話が鳴った。彼はマッチとパイプを置いて電話をとった。「ドクター・ドーンバーガーですが」電話はある患者からだった。1時間前に陣痛が始まり、今、早期破水がおこったのだという。彼女は20代はじめの若い女性で、これが初産だった。かなり神経質になっているが、強いて気を鎮めようとしているような、息せき切った話しぶりだった。これまで何度となく繰り返してきたように、ドーンバーガーは落ち着いた口調で指示を与えた。「ご主人はいますか?」「はい、先生」「じゃ荷物をまとめてすぐにご主人の車で病院へいらっしゃい。到着しだい診察します」「わかりました」「ご主人に運転には充分気をつけて、赤信号ではかならず停車するようにいってください。時間はたっぷりありますからね」相手が安心したようすが電話でもは

っきりわかった。これは彼がいつも使う手で、いわば処置そのものとおなじように仕事の一部と考えていることだった。にもかかわらず、彼は緊張しはじめていた。新しい患者を受け入れるときはいつもこうだった。理屈からいえばそんな感情はとっくになくなって当然だった。医者も長い間やっていると、しだいに物に動じなくなり、感情をまじえず機械的に物事を処理するようになる。しかし彼の場合はそんなふうにならなかった。おそらくそれは、この年になっても、彼がいまだに自分の一番好きなことをやっているせいなのだろう。彼はパイプに手をのぼしかけたが、ふと気が変わってまた受話器をとった。産科に彼の患者が到着することを連絡しておく必要があった。(p 129～) . . . .

未熟児室に入るときはだれでもそうするように、温度と湿度を調節された内部からガラス壁でへだてられているにもかかわらず、彼らは無菌ガウンとマスクをつけていた。2人は立ち止まり、ワイルディング看護婦が身を乗り出してこつこつとガラスを叩いた。中にいた若い看護婦が顔をあげて、マスクの上の目に物問いたげな表情を浮かべながら彼らのほうに近づいてきた。「アレクザンダーさんの赤ちゃんよ！」ワイルディングは相手に聞こえるように声を張り上げ、それからジョンを指差した。中の看護婦がうなずいて、2人についてくるようにと合図した。彼らは看護婦のあとをガラス仕切りにそってついて行き、やがて立ち止まった。看護婦が保育

器—部屋の中にある10あまりの中の1つ—を指さして、内部が見えるように少し向きを変えた。「えっ！これだけ？」ジョンの心にうかんだ驚きがそのまま言葉になってとびだしていた。ワイルディング看護婦のまなざしには同情がこもっていた。「あんまり大きくないでしょう？」ジョンは信じられないといった目でみつめていた。「こんなに小さい赤ん坊を見たのは……ぼくは、はじめてですよ」彼は呆然と立ちつくしてイゾレット式保育器の中を見おろしていた。これでも人間といえるのだろうか？—このちっぽけな、皺だらけの、彼の両手を合わせたぐらいの大きさしかない猿のような生き物が。赤ん坊は目をつむったまま微動だにしない。ただ小さな胸の規則的でかすかな動きが、かろうじて呼吸していることを示しているだけだった。最も小さな未熟児に合わせて作られた保育器の中でさえ、このちっぽけな頼りない肉体は哀れにも途方に暮れているように見えた。このかよわい肉体の中に生命が存在することさえ信じがたいように思えた。若い看護婦が外へ出て、彼らのそばにやってきた。ワイルディングが彼女に質問した。「目方はいくらあったの？」「1580グラムです」若い看護婦は事務的にいった。「おわかりになりますか、アレグサンダーさん—あなたの赤ちゃんがどのように保護されているかが？」彼は首を振った。このちっぽけな子供から一瞬たりとも目をはなすことはむずかしいような感じだった。若い看護婦は事務的にいった。「それを知りたがる人

もいるんです。わかればいくらかでも役にたつと思うんでしょね」ジョンはうなずいた。「そうだな、よかったら説明してください」看護婦は保育器を指さした。「この中の温度は常時36.5度に保たれています。空気には約40パーセントの割りで酸素が混入されます。赤ちゃんが楽に呼吸できるようにするためですわ。なにしろ肺がとっても小さいですからね。生まれたときはまだ肺が完全には発達していない状態だったんです」「ええ、わかります」彼の視線は胸のかすかな脈動に引き戻されていた。それが続いている間は、そこに生命があるということ、重荷を背負った小さな心臓が鼓動し、生き延びる望みの糸がまだ切れていないということだった。

看護婦は続けた。「あなたの赤ちゃんは自力で吸う力がないので、挿管法を使わなければなりません。あの細いチューブが見えますか？」彼女は保育器のてっぺんから赤ん坊の口までのびているプラスチックの紐のようなものを指さした。「あれは直接胃に通じています。あのチューブを通して1時間ごとにブドウ糖と水が送り込まれるのです」ジョンはためらった。それからこう質問した。あなたはこういう未熟児をたくさん見ていられるんでしょう？」「ええ」看護婦はそのあとに続く質問を察したらしく、真剣な顔でうなずいた。彼は彼女が赤毛を帽子の下に包み込んだ小柄な美人であることに気が付いた。それに驚くほど若かった。おそらく20歳前後だろう、どうみてもそれ以上ではなかった。だが職業上の有能さは身に

つけているようだった。「この子は育つと思いますか？」彼はふたたびガラス仕切りを通して保育器の中を見おろした。「それはなんとも言えせんわ」若い看護婦は額に皺を寄せてむずかしい顔をした。彼の質問に正直に答えよう、いたずらに希望を煽り立てることもことさらそれをぶちこわすことも慎もうとしているようすがありありとうかがえた。「育つ子もいるし、育たない子もいます。時には生きる意志を持っているように見える赤ちゃんを見かけることもあります。そういう赤ちゃんは生きるために戦うんです」彼は質問した。「この子はどうですー戦っていますか？」彼女は慎重に答えた。「まだわかりません。ただ、あと2ヶ月おなかの中に入れてうんと違っていただけでしょう」彼女は静かにつけ加えた。「いずれにしても苦しい戦いになりそうですわ」彼はもう一度小さな肉体に視線を戻した。今はじめて、この子はおれの息子だ。おれの生命の一部なのだ、という考えが彼の心にうかんだ。とつぜん、彼は、小さな温かい箱の中で孤独な戦いを続けているこのかよわいちっぽけな肉体に対する圧倒的な愛情で、身も心も灼かれるような感覚に襲われた。ガラスの壁を通してこう叫びたい愚かな衝動に駆られた。息子よ、おまえはひとりぼっちじゃない。ぼくが応援にきたんだよ。彼は保育器に駆け寄ってこうやってやりたかった。ほら、ぼくの手だ、しっかり握って力をふりしぼれ。それからこれがぼくの肺だ、それを使っておまえのかわりに呼吸させてくれ。諦めちゃい

かんぞ、息子よ、決して諦めるな！おまえには未来がある、ぼくと一緒にやれることもたくさんある—ただそのためにはどうしても生きてもらわなくてはならないんだ！いいか、よく聞けよ、そして頑張るんだ！今話しているのはおまえの父親だ、ぼくはおまえを愛している。涙がとめどもなくあふれでた。彼は肩に置かれたワイルディング看護婦の手を感じた。彼女は優しくいった。「もうそろそろ行きましょう」彼は言葉もなく、ただうなずいた。それから、赤ん坊に最後の一瞥を投げかけてか部屋から出ていった。(p 336～)・・・